



## フランス研修の思い出

宮住 建築設計事務所

宮住 勝彦 MIYAZUMI KATSUHIKO

建設部門

四国電力在勤中の 1988 年、フランス電力公社に研修に行く機会を得ました。その折の思い出等を思いつくままにご披露したいと思います。

### 1. 研修派遣の経緯

四国電力はその当時原子力発電に関する情報交換の一環としてフランス電力公社(以下 EDF と記載)と交換研修を行っており、3 回目のテーマが「原子力発電所の建設」であった。当時、四国電力は伊方発電所第 3 号機の建設を計画しており、発電所建屋の建設合理化が喫緊の課題であったことから、建築技術者である私が派遣されることとなった。

### 2. 研修の概要

EDF と国際郵便や FAX でのやり取りを行い(当時は E メール等はなかった!)以下のようなスケジュールとなった。

- 1988 年1月初～3月末 フランス パリでの語学研修(パリ ベルリッツ)
- 1988年4月初～4月末 EDF 本社研修
- 1988年5月初～5月末 パンリー発電所建設現場での研修(ノルマンディーにある発電所)
- 1988年6月初～中旬 EDF 本社研修
- 1988年6月中旬～下旬 EDF 中央研究所での研修(リヨン)

### 3. 研修に行くまでの課題

研修に行くことは1987年4月ごろに上司より指示があったが、大学ではドイツ語を選択しており、フランス語は全く勉強したことがなかった。そこで、急きょ NHK のフランス語講座入門編を勉強するとともに、上司に1987年9月～12月の間東京でフランス語を勉強させてくれるよう懇願して聞き届けられた。

東京行は転勤扱いとなり家族と子ども東京に引っ越し、私は4か月間フランス語漬けの生活を送った。学校は水道橋にあるアテネフランセという名門の語学であったが、25人のクラス中男は3人しかおらず後はほとんどが女子学生であった。女子学生のほとんどが大学でフランス語を専攻しており、アテネフランセにはフランス語会話を勉強しに来ているとのことで、私などは恥をかきに行ったようなものであった。また、日本人男性と結婚しているフランス人にも個人レッスンをお願いした。

もう一つの問題は家族を現地に連れていくかどうか、ということであった。四国電力の規定では一

年以上の研修でないと家族の旅費等が出ないと事であったが、妻の強い希望もあり一緒に連れて行くことにした。

#### 4. フランスで感じたこと、苦勞話

1988年1月上旬ようやく研修ビザがおり、1月16日成田からエールフランス機でパリへ出発した。パリでは凱旋門近くにアパートを借り、フランスでの生活がスタートした。当時、高校・大学の同期が海外電力調査会パリ事務所に勤務しており、アパート探しや EDF との調整をしてくれたので非常に助かった。以下にフランスで感じたことを思いつくままに紹介する。

##### ○気候

あまり知られていないが、パリの緯度は北緯48度くらいで北海道よりまだ北に位置している。

ただ、メキシコ湾流の影響で思ったほど寒くはなかったが、冬場はほとんど太陽が顔を出さずどんよりとした天気であった。

しかし、5月になると毎日晴天が続き気温も上昇して非常に過ごしやすい。特に夏は日本の5月頃の気温で湿度も低く非常に快適である。一番過ごしやすい7月上旬に帰国したのは残念であった。

##### ○食べ物

アパートの近くに週2回市場(マルシェ)が開かれるので、よく家族で出かけた。フランスはヨーロッパ有数の農業国であり、パリ近郊でも農業がさかんで近くの農家が新鮮な野菜や果物を市場で販売していた。日本と違うところは野菜も果物をすべて1キロ単位の量り売りである。日本のように粒がそろっていることはないが、値段は日本の半値といったところだろうか。特に安いのはオレンジでスペインバレンシア産のオレンジが一個20円くらいであった。

フランスは水よりワインが安いとよく言われるが、半分本当といったところか。

スーパーへ行くとテーブルワインという料理用のワインをおいてあり、その値段はミネラルウォーターとほぼ同じ値段である。また、チーズも 400 種類以上あると言われており、チーズを食べながら傾けるワインは最高であった。

美食の国フランスということで、様々な食材にもチャレンジした。ウサギ、カタツムリ、カエルなど…。どれもそこそこおいしかった！

##### ○旅行

せっかくの滞在なので、日程を調整してヨーロッパ各地を旅行して回った。ただ、ベルリンの壁崩壊の前年であり、西ヨーロッパは北欧を除いてほしい回ったが東ヨーロッパは敷居が高かった。

その中でも特に印象に残ったのはイタリアのベネチアとスイスのツェルマツトである。

ベネチアは車が全く役に立たない街であり、ツェルマツトは環境の観点から車の乗り入れが禁止されている街である。ツェルマツトのホテルから見たマッターホルンの朝焼けはいまだに目に焼き付い

ている。

## ○文化

フランスは国土は日本の約1.5倍、人口は約半分である。ただ、日本に比べて平野が多く、国土のおよそ6割は平野である。河川もセーヌ、ロワール、ガロンヌ、ローヌという4大河川が流れており、農業が非常にさかんである。

フランスで驚いたことは以下の点である。

### ・アパート

私たちの暮らしたアパートは凱旋門からほど近いヴィクトル・ユーゴー駅近くにあった。アパート探し  
の時、パリの友人から5件ほど物件が紹介されたが、それぞれの物件に「近代的」とか「古い」という  
コメントがついていた。確認してみると「近代的」な物件でも築50年以上、「古い」物件だとフランス  
革命以前に建てられたものもあり、フランスの歴史をしみじみと感じさせられた。因みに、我々のアパ  
ートは築60年ほどの「近代的」な建物であった。

### ・人種のるつぼ

移民が多いとは聞いていたが、人口の一割以上は北アフリカや東ヨーロッパからの移民である。

特に北アフリカは旧フランス領であったためか、非常に多い。その他にもベトナム、中国といったア  
ジアからの移民も多くみられた。

### ・キリスト教

フランス人の9割程度はカトリックであるが、国の祝日にキリスト教にちなんだ日が定められている  
のには驚いた。フランスでもイスラム教徒も仏教徒もいるはずだが……。西洋諸国におけるキリスト  
教の影響というものについて非常に考えさせられた。

### ・犬のふん

パリは犬のふんがいたるところに放置されている。街を歩くときは、下を見て歩かないと悲惨な目  
に会う。犬を飼うフランス人は非常に多いのだが、マナーの点においては日本人に軍配が上がる。

ただ、最近はそうでもないとの話も聞くが…。

## 5. まとめ

30年以上も前の話を思いつくままに書いてきた。家族3人全く見知らぬ国で半年間生活し、様々な  
経験をした。苦労もあったが、この研修で学んだことは人間何事も思い切って挑戦すれば道は開  
ける、ということである。現地ではつたないフランス語でもなんとか研修はできたし、生活も何とかで  
きた。

様々な困難に対して逃げることなく挑戦する気持ちが一番大切だ、と気づかされた記念すべき研  
修であった。

思い出話はまだまだ尽きないが、とりあえずここで筆をおく。

次回、機会があればインドネシア出張の話をご披露した。